文化

「シェイクスピア」勢ぞろい

◇研究書から舞台まで、日本での歴史を総覧に◇

佐々木 隆

○○○

英文法書に初めて紹介

シャーケスピール、と言ったらすぐには何のことかわからないかもしれない。劇作家、シェイクスピアが日本に初めて伝えられた時、実はこんな表記で紹介された。渋川六蔵という人がオランダ語から訳した英文法書「英文鑑」の中に見られる。一八四〇年から数年にかけてのことである。

それから数えて今年でちょうど百五十年になる。この間、シェイクスピアの作品は東洋のこの国で、どれほど多くの人によって繰り返し翻訳され、上演され、研究されてきたことだろうか。今もなお、年間数十冊の関連書籍が刊行される。また、映画や小説、テレビドラマの題材となったり、オペラや舞踊などに作り替えて上演されたりと、われわれの周囲のあらゆる方面にシェイクスピアは浸透しているのである。

シェイクスピアが日本人にどのように受け入れられていったのか、すなわち日本におけるシェイクスピア史の全容をまとめようと、私は水らく資料集めに奔走してきたが、その膨大な量には驚くばかりだ。百五十周年の記念の年に、これまでの成果をようやく一冊の本にまとめることができた。

「日本シェイクスピア総覧」と名付けたこの本には、これまで日本で出版された千冊余に上る研究書をはじめ、雑誌や新聞に掲載された論文や評論、翻訳書、訳注書、上演された劇、関連の映画やその他の芸術作品など、シェイクスピアが登場するあらゆるものを時系列に詰め込んだ。七百頁もある。

○○○

一冊ずつ目で確認

もともとは自分の勉強のために始めた作業だった。八年前に大学院に入った時、私はそれまで勉強していたアメリカ文学をやめてシェイクスピアの研究に取りかかった。そこでこれまでどんな研究がなされているか、どこの図書館にどの論文があるか、すぐわかるようにしておこうというつもりだったのである。

ところが、国会図書館のような大きな図書館でも意外にそろっていないことがわかってきた。それほど出版量が膨大であることの証明でもあるのだが、必要なものがどこにあるかわからず不便を感じるうち、徹底的に文献を掘り起こしてみようという気になった。

図書館の書籍と「英文学研究」「英語青年」などの研究雑誌を過去にさかのぼって一つずつ当たることから始め、そこにないものを東京・神田や早稲田の古書街で補うことにした。

ひと口に言うと、警察の捜査みたいなものである。情報化時代でコンピューターが導入されたとはいえ、シェイクスピアの研究書かどうかを書名から判断するのが難しいものもあるし、「シェイクスピア研究」や「シェイクスピアの悲劇」のようにたくさんの本などは、シェイクスピアの研究とは全く無縁のもので、危うくだまされるところだった。

平日はほとんど毎日、古本屋に行って棚の端から関係のありそうな本、部分的にでもシェイクスピアに関係する記載のありそうな本をすべて当たっていった。二度と巡り合えそうもない本は、多少無理をしてでもその場で手に入れた。

○○○

偏りがある研究分野

休日は集めた文献をリプロに打ち込む。それをハードコピーしたリストはいつもカバンに入れて持ち歩いていた。古本屋で珍しい本に出合った時、それがまだリストに入っていないかどうか確認するためである。

大学院を修了してからは、講師を務める五つの大学を利用し、講義の合間に図書館で文献探しをした。英文学の棚ばかりでなく、心理学や比較文化など、シェイクスピアが出て来るかもしれない棚はすべて一冊一冊見ていった。

「総覧」を完成して、私に見えてきた点がいくつかある。第一に、日本におけるシェイクスピア研究の分野に偏りがあること、第二に、日本独自の観点からのシェイクスピア研究が少ないこと、第三に、日本の伝統芸能である歌舞伎・能狂言との関連性について十分な研究がなされていないこと、第四に、日本のシェイクスピア研究の成果が海外へあまり紹介されていないことなどである。

第一点についていえば、海外で高い評価を受け、今年アカデミー特別賞を受賞した黒沢明監督の「蜘蛛巣城」と「乱」はいい例であろう。外国では研究書も出版されているが、わが国ではこの二作を取り上げた研究はほとんどない。

NHKの「シェークスピア劇場」で全作品が放映されたり、ビデオで映画が簡単に入手できるようになったので、映像化されたシェイクスピアについての研究にも、もっと目を向けるべきではなかろうか。

○○○

独特の観点が必要に

第二点については、シェイクスピアに限らず外国文学を研究する者にとっては常につきまとう問題だと思われる。イギリス人には通れない日本独特のシェイクスピア論が、日本文化の根底に流れている仏教的な観点から展開できるのではないだろうか。

第三点については、近松門左衛門とシェイクスピアの単なる比較研究だけでなく、実際に歌舞伎や能狂言の要素を上演に取り入れることの可能性も考えられる。「蜘蛛巣城」や「乱」、鰐川幸雄の「マクベス」と「テンペスト」、宗片邦義による能シェイクスピア、人間国宝三宅藤九郎の新作狂言「じゃじゃ馬馴し」など、新しい試みもされている。

第四点については、海外に向けたシェイクスピア研究が日本にはほとんどないことであろう。つまり、英文による研究書が少ないということである。ロンドンのグローブ座再建に先立ち、一九八八年春に東京グローブ座がオープンし、国際シェイクスピア学会が来年東京で開催されることになって何かと日本が注目されながら、わが国のシェイクスピア研究を総括する仕事がこれまで積極的に行われてこなかったようだ。

こうしたことからも、私はまた"シェイクスピア捜し"を再開するつもりでいる。今度はビデオ作品や翻訳、劇評などさらに範囲を広げようと思っている。最近、自宅に専用の書庫（ただし三・三平方㍍）を作った。

（さきき・たかし＝駒沢大学シェイクスピア・インスティテュート助手）

日本経済新聞

1990年（平成2年）5月9日（水曜日）